様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 １３ 日現在

機関番号：３４４２９
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３７０５３３

研究課題名（和文）日本語の用言データベース作成とそれに基づく計量分析および合成形用言の語構成史

研究課題名（英文）Making of a database of Japanese declinable word.and quantitative analysis and a study about history of word composition based on this database

研究代表者
村田　菜穂子（MURATA, NAHOKO）

大阪国際大学・国際関係研究所・教授

研究者番号：６０２８００６２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,400,000円

研究成果の概要（和文）：まず、本研究に先立ち、関連する形容詞・形容動詞についての研究を補完するために、狂言、キリシタン資料、擬古物語、中世の日記・紀行文の形容詞の語構成についての分析を行うとともにそれに基づく考察を行った。
次に、万葉集および中古散文22作品について、動詞データの抽出を行い、語構造分析を行い、語彙表を作成するとともに計量的分析を行った。

研究成果の概要（英文）：First,before this research,to complement a related research work about adjective and adjectival verb,we analized the adjective in Kyogen,Christian work,Pseudo-classical Narratives,a Diary and a Travelogue from the Middle Ages from the point of view of the theory of the composition of the word and considered in deatil baseod on that.
Next,we extracted verb from Manyoshu and 22 Old and Medieval Prose Works,analized those verbs from the point of view of the theory of the composition of the word and made "A Contrastive Lexical List of Verbs".
Moreover,we did some quantitative analyses.

研究分野：人文学

キーワード：語彙　用言　計量分析

１．研究開始当初の背景

（１）本研究に関連する先駆的研究としては、奈良時代から鎌倉時代に亘る作品毎の見出し語使用頻度を一覧表化した『古典対照語い表』（宮島氏）がある。その後「平安文学における形容詞対照語彙表」（安部氏ら）と『平安時代複合動詞索引』（東辻氏）が刊行されているが、これらはいずれも一共時態に限定されている。応募者は、これまでの研究で、古代から中世に亘る通時的な視点を備え、かつ、語構成様式の分析も含めた形容詞・形容動詞の語彙表を作成してきた。本研究は、これらをさらに発展させようとするものであり、形容詞・形容動詞と合わせて用言全体としての動向を探ろうとするものである。

（２）本研究が対象とする古典語作品については、テキストの電子化が進み、テキストデータを形態素レベルまで解析する環境やツールが開発され、一般に公開されるようになってきた。さらに、中古の和文系資料を対象とした形態素解析辞書も整備され、これらのツールや辞書を使用することで、データを分析する環境が整いつつあると言える。

（３）また、本研究によって作成した語彙表が公開され、広く利用が可能になることによって、従来にはなかった日本語動詞・形容詞・形容動詞という「用言」の見出し語形と用例数及び語構成様式を通時的に概観できる資料が完成することになり、語彙研究及び語彙史研究分野において特に多くの利用が想定されるだけでなく、時代毎の状況を加味した古典教育や古語辞典編集などにも利用されるものと考えられる。

（４）さらに、データベース検索システムを付与した形式で公開することによって、今日盛んになりつつある計量的分析をさまざまな角度から可能にし、計量国語学の進展にも寄与することになる。

２．研究の目的

まず、上代から中古に亘る通時的な視点に立ち、古典語の動詞語彙について、語構造論及び造語論の両観点から分析を行って、一つ一つの語の語構成を記述するとともに分類を行い、その一方で、語彙表を作成するとともに語構成分析結果を反映させたデータベースシステムを構築し、それを公開することによって、日本語学研究、特に、語彙研究及び語彙史研究分野に有益な資料を提供することを目的とする。

さらに、上記の資料を基にコンピュータによる量的データの分析的研究・実証的研究を行い、最終的に、「複合動詞の語構成史」を構築し、従来の研究方法では得られなかった知見を導き出すことを目的とする。

３．研究の方法

まず、上代から中古に亘る資料から動詞の採取を行い、これらのデータベース作りを進めるとともに、コンピュータによる量的データならびに質的データの分析を行う。

次に、作品別のデータ・語構成別のデータ・使用頻度順データなどの各種分析データを必要に応じて取り出せるシステムの構築作業を進める。

最終的には、これまでの形容詞・形容動詞についての研究成果を踏まえて、上代から中古に亘る動詞語彙の語構成様式や語構成要素についての歴史的変遷について考察し、その集大成としての「語構成史（語構成様式の歴史的変遷）」の構築に取り組む。

具体的な計画・方法は次のとおりである。

（１）上代、中古の資料から動詞を採取し、上代語及び中古語（動詞）のデータベース作りを進める。

（２）（１）で採取した動詞の語構成分析を行い、動詞の一つ一つについて、語構成分析情報（語構造論的分析情報・造語論的分析情報）を配し、それぞれに分類コード付けを行う。これらの語構成分析情報と使用頻度の情報等、すべての情報を入力し、データベースを作成する。

（３）（２）のデータベースを元にして、下記のような量的データに関する資料を作成するとともに、計量的分析を行う。

①共時的分析資料

（Ａ）使用頻度順対照語彙表（共通作品数付）／語末から引く逆引き索引

（Ｂ）異なり語数、延べ語数、用語使用率などの資料

（Ｃ）単語のレンジ（使用領域の広さ・狭さ）と使用度数の関係性、単語のウエイト（単語の使用度数とレンジとの関係）などの分析資料

（Ｄ）クラスター分析（作品間の距離の分析）

②文体（ジャンル）別分析資料

（Ｅ）ジャンル別の対照語彙表／ジャンル毎の特有語一覧表

③通時的分析資料

（Ｆ）異なる時代の動詞語彙の類似度・相違度（距離）を測る資料

（４）（３）で行った分析結果を用いて質的な側面からの分析を行う。具体的には、上代語及び中古語の動詞の分析結果と同時期の形容詞・形容動詞についての分析結果とを比較・対照し、語構成様式及び語種についての歴史的変遷を考察する。

４．研究成果

（１）関連する形容詞・形容動詞についての研究を補完するために、中世後期の形容詞の語構成についての分析を行うとともにそれに基づく考察を行った。

①日本語形容詞語彙の史的研究のための基

礎資料として、これまで継続して公表してきた形容詞対照語彙表の延長線上に位置づけるべく、室町時代の形容詞を概観するために狂言、キリシタン資料に使用された形容詞を採取し、語構成情報を分析して、それらを対照した語彙表を作成した。(「狂言の形容詞」、「キリシタン資料の形容詞」、「狂言・キリシタン資料の形容詞の語構成」)
②①で作成した語彙表を基に、狂言・キリシタン資料の形容詞の体系性を明らかにする中で、中古散文で起こった変化、すなわち、長単位語化・高次元化の傾向が引き継がれているのではなく、中古散文を除く他の作品と同様、一定のラインに落ち着いていることがわかり、むしろ、中古散文の特異性があらためて浮き彫りになった。(「狂言ならびにキリシタン資料の形容詞についての一考察」)
③形容詞語彙から見た中古散文二二作品の類似度を測る観点として、これまで行ってきた形容詞の語構成という質的な側面からの分析結果と、多変量解析による数量的な分析結果、および本稿で新たに導入した多次元尺度法による分析結果が、いずれも同じような傾向が認められることを示した。(「形容詞から見た中古散文二二作品のグループ化についての試み」)
④上代形容詞と中古形容詞とでは語構成法が大きく異なり、中古形容詞においては、「X＋形容詞」という複合的形式の第二次形容詞が多数生産される特徴が現れる。そして、後項要素となる形容詞には偏りがあり、特定の形容詞が集中的に複合的形式の第二次形容詞の構成に与っている。また、後項要素になる形容詞によって、前項にとる要素Xが、専ら【A】動詞連用形であるもの（動詞連用形卓越型)、あるいは、専ら【B】名詞であるもの（名詞卓越型)、そして、【C】動詞連用形と名詞とほぼ同程度である(拮抗型)に分かれ、【A】のタイプになる形容詞は「情意形容詞」、【B】のタイプになる形容詞は「状態形容詞」、【C】のタイプになる形容詞は「感覚形容詞」という特質が認められることを明らかにした。(「中古形容詞に見られる複合的方式についての一考察」)
⑤国立国語研究所が公開している「日本語歴史コーパス平安時代編」と、これまで参照してこなかった『枕草子』の索引を利用して『枕草子』の用例を改めて調査し直した結果、従来の調査結果との差違はほとんどなく、『枕草子』の形容詞が同時代の散文作品の中では第一次形容詞をはじめとする基本的な形容詞の使用頻度が高いという特徴があることを検証すると同時に、「日本語歴史コーパス平安時代編」の有効性と一部の語の品詞情報に関する誤りないし問題点を見出した。(「索引とコーパスを利用した形容詞語彙の採取について」)
⑥①の室町時代の形容詞を概観する資料に続くものとして、擬古物語および中世の日記・紀行文の形容詞に使用された形容詞を採取して、語構成情報を分析して、それらを対照した語彙表を作成した。(「擬古物語の形容詞」、「中世の日記・紀行文の形容詞」、「中世の日記・紀行文の形容詞の語構成」)

（２）万葉集および中古散文 22 作品について、動詞データの抽出を行い、語構造分析を行い、語彙表を作成するとともに計量的分析を行った。
①万葉集については、古典索引刊行会出版『萬葉集電子総索引』を利用し、中古散文 15 作品については、国立国語研究所コーパス開発センター公開の「日本語歴史コーパス　平安時代編」を利用して、中古散文 7 作品については、索引を利用して、動詞データの中手を行った。
②①で抽出した動詞データについて語構造論的分析を行い、動詞の一つ一つについて、語構成分析情報を配し、これらの語構成分析情報と使用頻度の情報等、すべての情報を入力し、語彙表を作成するとともに計量的分析を行った。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）
〔雑誌論文〕（計 10 件）
①村田菜穂子、前 川　武、擬古物語および中世の日記・紀行文の形容詞の語構成、国際研究論叢、査読無、29-3 巻、2016、129-141
②村田菜穂子、前 川　武、中世の日記・紀行文の形容詞、国際研究論叢、査読無、29-2 巻、2015、173-187
③村田菜穂子、前 川　武、狂言ならびにキリシタン資料の形容詞についての一考察、国際研究論叢、査読無、29-2 巻、2015、33-46
④村田菜穂子、前 川　武、擬古物語の形容詞、国際研究論叢、査読無、29-3 巻、2016、159-170
⑤前 川　武、村田菜穂子、索引とコーパスを利用した形容詞語彙の採取について、国語語彙史の研究、査読有、34 巻、2015、227－241
⑥村田菜穂子、中古形容詞に見られる複合的方式についての一考察、国語語彙史の研究、査読有、34 巻、2015、91－109
⑦村田菜穂子、前 川　武、狂言・キリシタン資料の形容詞の語構成、国際研究論叢、査読無、28-1 巻、2014、149－163
⑧村田菜穂子、形容詞から見た中古散文二二作品のグループ化についての試み、国語語彙史の研究、査読有、33 巻、2014、97－109
⑨村田菜穂子、前 川　武、キリシタン資料の形容詞、国際研究論叢、査読無、27-3 巻、2015、223-234
⑩村田菜穂子、前 川　武、狂言の形容詞、国際研究論叢、査読無、27-2 巻、2015、75-86

６．研究組織
(1)研究代表者

村田　菜穂子（MURATA NAHOKO）
大阪国際大学・国際関係研究所・教授
研究者番号：６０２８００６２

(2)研究分担者

前川　武（MAEKAWA TAKESHI）
大阪国際大学短期大学部・ライフデザイン
総合学科・教授
研究者番号：　３０２３８８４４